

<報告・記録>

# 日本伝統文化をテーマとした異文化体験の実践報告

—— 着物着付け体験を通して見られた異文化理解の効果 ——

古宮 弥生

東亜大学留学生別科  
yoi.june@gmail.com

## 《要旨》

本実践は留学生を対象に Upper-case culture である「着物」を通して、Lower-case culture である「行動・価値観・生活習慣」などを指導することを目的とする。2017年1月から2020年の2月まで計4回、18名の留学生を対象に着付け体験を行い、留学生に行ったインタビュー結果と、参与観察記録を基に分析をした。

本実践の結果から、Upper-case culture から Lower-case culture へ移行することで、可視化されにくい日本文化に対する理解が深まる効果、日本での日常を今までとは違った目線で理解しようとする効果、文化を客観的に分析し気づきを生む効果が見られた。

キーワード：Upper-case culture Lower-case culture 日本文化 異文化体験

## 1. はじめに

1999年に National Standards in Foreign Language Education Project が打ち出した『21世紀の外国語スタンダードズ』Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century では、外国語学習の目標領域を5つに分類している。Communication (コミュニケーション), Cultures (文化), Connections (つながり), Comparisons (比較), Communities (地域社会) は、5つのことばの頭文字にCが付くことから5Cとも呼ばれる。本実践に大きく関わる Cultures (文化) について、詳しく見ていきたい。Cultures (文化) は、外国語学習に必要な目標領域のひとつとして、スタンダード 2.1, スタンダード 2.2 のふたつに分け

て考えられている。以下に聖田(2002)の日本語訳を引用する。

スタンダード 2.1: 日本人の習慣・慣習 (practices) を学び、その背景 (perspectives) について理解する。

スタンダード 2.2: 日本文化における文化的所産・産物 (products) とその背景 (perspectives) について理解する。

引用: 翻訳者: 聖田京子 (2002) 『21世紀の外国語学習スタンダードズ「日本語学習スタンダードズ」』国際交流基金

このように、文化にはふたつの側面を有するという考え方は Bennett (1998) にも見られる。Bennett (1998) も文化を Upper-case culture

※) 2020年3月31日まで在職

(大文字の文化)と Lower-case culture (小文字の文化)のふたつに分類しており, Upper-case culture を「歴史・政治・芸術」といった文化だとし, Lower-case culture を「行動・信念・価値観・生活習慣」などの文化とした。5Cの Cultures (文化)と照らし合わせると, スタンダード 2.1 は Lower-case culture を理解すること, スタンダード 2.2 は Upper-case culture を理解することが外国語学習の目標としてあることがわかる。

山本 (2005) は, Upper-case culture と Lower-case culture を比較すると, 異文化間接触という場面で問題になりやすいのは Lower-case culture であると述べた。確かに筆者が留学生と接する中でよく問題に挙がるのは, 時間の概念の違い, アパートでの騒音, 公共の場所の使い方, ゴミの始末などであり, 留学生側に Lower-case culture の理解が必要な場合が多い。そのため, 日本文化の授業に可視化しにくい Lower-case culture をどのように取り入れるかが課題のひとつだと言える。

また, 中村, 守内 (2018) は, 非母語話者日本語教師にも目を向け, Lower-case culture の指導の難しさを指摘している。日本文化には可視的な部分だけでなく, 価値観など見えない部分が多いため, 非母語話者日本語教師が母国文化と異なる日本文化をどう指導するのかという課題も挙げている。

したがって, 本実践は主に Lower-case culture をどのように日本文化の授業に取り入れるかに念頭を置き, 「着物」という Upper-case culture から「行動・価値観・生活習慣」という Lower-case culture へと移行する日本文化の授業を試みる。

## 2. ことばと文化

日本文化を授業で行う際, 文化ということばの概念の捉え方が多様なため試行錯誤する現状があることから, 文化は指導すべきものなのかという指摘がなされている (中村, 守内 2018)。この文化を指導するということについて, 山田 (2018) は日本で生活していれば日本

文化に触れられるが, 漫然と日本で生活していて身に付くというものでもないため, 意識して学ぶ必要があると述べた。また, 語学と同じように日本文化の知識も体験しなければ身につかないとし, 異文化体験を重視している。森川 (2019) は, 『上級のとびら』や『まるごと日本のことばと文化』シリーズなど, ことばと文化が同列の主要級の扱いにして取り上げた教材が開発されていることに触れ, 5Cを例にことばと文化が切り離せないという考え方が定着しているとした。これらを踏まえ, 筆者は特に可視化しにくい Lower-case culture は学習者独自の学習が難しく, 本実践のような日本語教師等の指導, 手助けが必要であり, ことばと同様に日本文化について学ぶ必要があると考える。



写真1 2017年体験の様子



写真2 2019年体験の様子

### 3. 実践の概要

本実践は、留学生を対象に Upper-case culture である「着物」を通して、Lower-case culture である「行動・価値観・生活習慣」を指導することを目的とする。

筆者は2017年1月から2020年の2月まで計4回、留学生を対象に着付け体験を行った。準備出来る着物が振袖だったことから女性のみを対象とした。着物は東亜大学他学部所持の振袖4枚の使用許可をもらい実施した。着付け体験は基本を午前とし、2019年だけ着物の枚数と参加留学生人数の関係から午前4名、午後4名の2部に分けた。計4回の体験人数は18名である。Bennett (1998) は Lower-case culture を、信念、行動、および相互作用する人々のグループの価値観と定義している。そのため、本実践では民族衣装の選択と所作、ゴミに対する意識、非言語コミュニケーションを Lower-case culture と定義し指導を行った。本実践は全留学生に行ったインタビュー結果と、参与観察記録を基に分析した。インタビュー内容は、①着物を着たことがあるか、②着物を着た感想は、③着物を着て感じたことはである。この時、留学生同士で活発な意見交換があった。

留学生別科の女子留学生には、中国人、ベトナム人、ネパール人が在籍していたが、参加したのは中国、ベトナムの2カ国の留学生であった。参加学生の詳細は表1のようになる。

2017年から2019年までは1月に着物着付け体験をし、着付け後に留学生別科の他の学生達に着物姿を披露した。披露が終わった後、近隣の神社に行き留学生別科全体で初詣のために神社へ向かった。2020年は着物着付け体験の希

望者を募り、2月に着物着付け体験を実施した。2月であったことから初詣には不向きと考え、神社訪問は行わなかった。

次は本実践の結果と考察について述べる。



写真4 2019年体験の様子



写真4 2020年体験の様子

表1 参加学生詳細一覧

年	午前人数	午後人数	累計人数	国別体験人数(人数)
2017	2	0	2	中国(1), ベトナム(1)
2018	4	0	4	中国(3), ベトナム(1)
2019	4	4	8	中国(0), ベトナム(8)
2020	4	0	4	中国(0), ベトナム(4)
合計	14	4	18	中国(4), ベトナム(14)

#### 4. 結果と考察

次は、本実践の結果を示し考察を述べる。以下はインタビューの結果である（表2）。

表2：インタビュー結果

①着物を着たことがあるか
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ない。※一部、浴衣と着物との区別がない学生がいた。</li> </ul>
②着物を着た感想は
<p><b>【芸術的評価】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ とてもきれい。</li> </ul> <p><b>【個人の感想】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 着物を着られて嬉しい。</li> </ul> <p><b>【行動】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 歩きにくい。</li> <li>・ 着るのが大変。</li> <li>・ 着物（の脇が開いているので）ちょっと寒い。</li> <li>・ 歩く時、座る時、ちょっと大変。</li> </ul>
③着物を着て一番感じたことは
<p><b>【袖の収納について】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 着物は服と鞆が一緒になっている。</li> <li>・ 着物に右はゴミ、左はハンカチを入れるルールがあったことにびっくりした。</li> <li>・ 洋服は腕のところにゴミをいれないのに、着物は袖にゴミを入れるのが違う。</li> <li>・ ゴミを着物に入れるから、日本はいつも道がきれいなのだろうか。</li> <li>・ 着物の時代からゴミに対するルールがあったのか。</li> <li>・ このような（ゴミを持ち帰る）意識を私の国の人が実行したら、もっと国がきれいになると思う。</li> <li>・ （ルールを守らない）留学生は悪いね。日本のゴミのルール守らないと。</li> </ul> <p><b>【袖の長さについて】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 袖の長さで結婚しているかいないかがわかるのが怖い</li> <li>・ 袖の長さで独身と知らない人が見てもわかるので、ドキドキした。</li> <li>・ 振袖を着ると「独身です」と言いながら歩いているみたいで緊張する。</li> <li>・ 独身かどうか着物で表す必要があるのか。</li> <li>・ どうして日本人は女の人の着物だけ袖で独身を示すのか。</li> <li>・ 言わないで（着物の袖で）独身を教えるとどんなことがあるのか。</li> </ul> <p><b>【母国との比較】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 私の国（中国）には、民族衣装がないので悲しい。</li> <li>・ 私の国（中国）も民族衣装を作る必要がある。あると団結力を感じる。</li> <li>・ 私の国（中国）には国の服はない。大体スーツで大丈夫。</li> <li>・ 中国の少数民族は着物に似た国の服がある。とてもきれいなので日本人に紹介したい。</li> <li>・ ベトナムの民族衣装、アオザイを日本にも紹介したい。</li> </ul>

### ①着物を着たことがあるか

毎年「ある」と答える留学生がいるが詳細を聞くと全て浴衣であり、着物と浴衣とが混合して認識されているという事実が判明した。次に、②着物を着た感想はという質問では、「芸術的評価」、「個人の感想」、「行動」に関する意見が寄せられた。その中でも、「きれい」という芸術的評価や、「歩きにくい」といった着物での行動に関する意見がとても多かった。着物を着用した時の歩き方等には、着物を汚さないように、きれいに見えるように配慮した所作が規範としてある（山内，2012）。着物を着ることが初めての留学生ばかりだったので、実技指導として歩き方、車の乗り方、階段の上り方などを指導した。

### ②着物を着た感想は

この質問では「袖の収納」、「袖の長さ」、「母国との比較」に関する意見が出た。「袖の収納」については、「着物に右はゴミ、左はハンカチを入れるルールがあったことにびっくりした」など驚いたことに関する意見が出された。また、日本での留学生生活を振り返った留学生からは「ゴミを着物に入れるから、日本はいつも道がきれいなのだろうか」や、ゴミに関する意識が昔からあったことに対して「着物の時代からゴミに対するルールがあったのか」のような気づきがあった。その他に、本実践では「(ルールを守らない)留学生は悪いね。日本のゴミのルール守らないと。」と戒めの声も出た。

「袖の長さ」については、「袖の長さで結婚しているかいないかがわかるのが怖い」、「振袖を着ると“独身です”と言いながら歩いているみたいで緊張する」など、ことばにしないでメッセージを伝えることへの意見が多く出された。さらに、「独身かどうかを着物で表す必要があるのか」や、「どうして日本人は女の人の着物だけ袖で独身を示したのか」などの疑問も挙げられた。そのため、非言語でメッセージを発する長所、短所、範囲について考えさせた。留学生からは、「恥ずかしくて言いにくいことを伝えるのにいい」、「ずっとしゃべっているみたいで嫌だ」、「知らない人にも伝えられる」などの意見が出された。その他に日常の非言語メッセ

ージとして、スーパーの有料レジ袋カード、横断歩道が青になったことを知らせる鳥の声、電車の優先座席のマーク、電車内の静けさなどが出された。

### ③着物を着て一番感じたことは

ベトナム人留学生と中国人留学生では、①②の意見に差異は見られなかったが③の「母国との比較」に関しては国別で異なる意見が出された。また、中国人留学生は同国であっても意見が2つに分かれた。ベトナム人留学生はどの年も「母国との比較」として、アオザイという民族衣装を紹介し、日本の着物より価格が低く、着物より日常で着ることが多いと説明した。しかし、中国人留学生に関しては、中国には民族衣装（少数民族の民族衣装）があるという意見と、中国全土を代表する民族衣装が無いとする意見に分かれた。この民族衣装はあると意見を出した留学生は2017年に、中国全土に代表する民族衣装が無いと意見する中国人留学生は2018年に日本文化を体験した。年度の異なりから、お互いに意見交換をする機会を設けることが出来なかった。2018年に着付け体験をした中国人留学生のひとは、着物やアオザイに触れ、どの国の民族衣装も民族の「団結」を示すのだという気づきがあった。そして、留学生はUpper-case cultureである民族衣装は、Lower-case cultureとして可視化できない民族の「団結」という非言語的メッセージを含んでいるという見解を示した。

## 4-1. 民族衣装の選択と所作

留学生が母国では非母語話者日本語教師も浴衣を着物と呼んでいたため、選択され着られていることを知らなかったと述べていたことが印象的であった。これは、Lower-case cultureとして日本の民族衣装がフォーマル度、季節、用途、性別等によって選択され使用されるという行動が、可視化しにくいためであると考えられる。民族衣装を紹介するとき、場面、用途、季節、性別、年齢などで選ばれ着られるという選択行動の説明が必要である。

着物を着用した時の所作については、歩き方、座り方、車の乗り方、階段の上り方を指導

したが、神社までの道中、着物に慣れていないため留学生が苦勞する様子が見られた。インタビューで出た「歩く時、座る時、ちょっと大変」という意見は率直な意見だと感じる。

#### 4-2. ゴミに対する意識

日本ではゴミを処理する際、他者への配慮が必要である。例えば、三重県のホームページでは登山やハイキングをする場合のゴミの持ち帰りは常識とし、公園などでもタバコのポイ捨て禁止、ゴミの持ち帰りを呼び掛けている。茶道でも客は自分が出したゴミを右袂に入れ持ち帰ることが規範とされている(千, 2009)。ゴミがこぶしより大きな場合や水分を多く含む場合は、鞆や袋に収め持ち帰る。この袖の収納は通常、振袖では行われず小袖という袖の場合に行われる。このように日本にはゴミを持ち帰る規範が存在するため、公共の場や空き地にゴミを放置することは集団での行動の基準、行動のルールに違反していると言える。このたび着物を通して、日本文化に対する単純な驚きから留学生生活で見た道路などを振り返った気づき、同じ留学生に対する戒めへとゴミに対する理解が深くなる様子が見られた。これは、「着物」という Upper-case culture の体験から「ゴミに対する意識」という Lower-case culture への思考へと移行するプロセスが重要だったと考える。着物から日本のゴミに対する意識という Lower-case culture を学び、社会に照らし合わせることで気づき生まれ、可視化されにくい日本文化に対する理解が深まるという効果が得られた。

#### 4-3. 非言語コミュニケーション

金田一(2014)は、父であり国語学者である晴彦が、よく講演で「日本人は言葉にすることを嫌う」という特性があると話すと述べている。この特性を金田一(2014)は「言葉にしない文化」と称した。日本語はことばにしないぶん、非言語コミュニケーションとしてメッセージが発せられることがある。非言語コミュニケーションとは、非言語メッセージを使って他者の心に意味を生じさせるプロセスを意味する

(リッチモンド, マクロフスキ, 2006)。ことばにせずとも相手にメッセージを伝えることが出来る日本文化の例として、家紋、お歯黒、礼の角度、座席の上座下座などが挙げられる。

それと同様に着物の袖の長さはデザインであるだけでなく、非言語コミュニケーションとして「未婚」というメッセージを発している。このことに対して留学生から驚きが見られ、その驚きが非言語コミュニケーションに対する関心へと繋がった。その関心をさらに広げるために、非言語的コミュニケーションの長所、短所、範囲を考えさせ、生活の中で見落としている非言語的コミュニケーションがあるのではないかと疑問を投げかけた。投げかけによって、留学生は日常で目にする物や、日本人の行動などに目を向け非言語の意味を理解しようとする様子が確認された。日本文化の授業では、「着物」という Upper-case culture の体験から「非言語コミュニケーション」という Lower-case culture へと視点を移行するプロセスが重要であると考える。着物から非言語コミュニケーションを学ぶことで、留学生が日本での日常を今までとは違った目線で理解しようとする効果が見られた。

本実践は、Upper-case culture「着物」から可視化されにくい Lower-case culture「行動・価値観・生活習慣」へと移行させることで、留学生の日本文化に対する理解、気づきを促すことが出来た。特にゴミに対する意識、非言語コミュニケーションの Lower-case culture は、可視化されにくい日本文化に対する理解が深まるという効果、留学生が日本の日常を今までと違った目線で理解しようとする効果が見られた。それだけでなく、日本文化体験で学んだことを母国文化に照らし考察し、民族衣装をグローバルに分析し、「団結」という非言語的メッセージがあるということに気づく様子が確認出来た。このことから、本実践の結果として、文化を客観的に分析し気づきを生む効果も挙げられる。本実践を図1にまとめた。

Upper-case culture

「着物」



Lower-case culture

「行動、価値観、生活習慣」

指導する Lower-case culture	指導項目	指導内容
民族衣装の選択	着物と浴衣の違い	着物と浴衣がフォーマル度や季節などで選択されているという選択行動を説明
着物での所作	着物での行動	着物着用時の歩き方、座り方等を指導
ゴミに対する意識	着物の袖収納	着物着用時の収納、ゴミの持ち帰りの方法を指導
非言語コミュニケーション	袖の長さの意味	着物に隠された非言語メッセージの指導



効果

可視化されにくい日本文化に対する理解が深まるという効果
日本での日常を今までとは違った目線で理解しようとする効果
文化を客観的に分析し気づきを生む効果

図1：Upper-case culture から Lower-case culture への指導の移行と効果

## 5. まとめ

本実践は、留学生を対象に Upper-case culture である「着物」を通して、Lower-case culture である「行動・価値観・生活習慣」などを指導することが目的であった。本実践の結果から、Upper-case culture 「着物」から可視化されにくい Lower-case culture 「行動・価値観・生活習慣」へと移行させるというプロセスに効果があることがわかった。本実践の効果として、可視化されにくい日本文化に対する理解が深まるという効果、日本での日常を今までとは違った目線で理解しようとする効果、文化を客観的に分析し気づきを生むという効果が見られた。

本実践の課題として、年度が異なる留学生同士の意見交換の場を設けることが挙げられる。年度が異なる留学生同士の意見交換の場を設けることで、より深い気づきや疑問を促すことが

出来たのではないかと考える。また、もうひとつの課題として本実践のように Upper-case culture から Lower-case culture へと移行する日本文化の実践報告が増えることが必要である。なぜなら、実践報告が増えることでわかりにくい Lower-case culture が文章で可視化され、非母語話者日本語教師が日本文化の授業を行う際の参考になると考えるからである。

【参考文献】

- 金田一 秀穂 (2014)『金田一家、日本語百年のひみつ』朝日新書
- 千宗左 (2009)『主婦の友新実用 BOOKS 決定版 はじめての茶の湯』主婦の友社
- 中村 祐理子, 守内 映子 (2018)「グローバル人材育成を目指した日本語教育における「日本文化・事情」指導の役割」『目白大学高等教育研究 (24)』: 49-57
- 三重県農林水産部みどり共生推進課自然公園版「みえの自然楽校 自然を楽しく遊ぼう！」  
<https://www.pref.mie.lg.jp/MIDORI/HP/shizen>
- 森川 結花 (2019)「日本語教育における伝統文化をテーマとした異文化プログラム開発の可能性」『甲南大学教育学習支援センター紀要』4号: 53-64
- 山内しのぶ (2012)『別冊家庭画報 振袖大好き!』世界文化社
- 山田 佳子 (2018)「留学生と児童との共修についての実践研究—茶道・伝統的な遊びを通して—」『和歌山大学クロスカル教育機構研究紀要』第1巻: 39-45
- 山本 志都 (2005) 日本語教育研究協議会 第3分科会 「異文化コミュニケーションの日本語教育への活用」文科省  
[https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kyoiku/taikai/17\\_tokyo/bunkakai\\_3.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/taikai/17_tokyo/bunkakai_3.html)
- National Standards in Foreign Language Education Project. (1999) *Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century*. NY:National Standards in Foreign Language Education Project.  
日本版: 聖田 京子 (2002)『21世紀の外国語学習スタンダードズ「日本語学習スタンダードズ」』国際交流基金日本語国際センター  
[https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/syllabus/pdf/sy\\_honyaku\\_9-lusa.pdf](https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/syllabus/pdf/sy_honyaku_9-lusa.pdf)
- Milton J. Bennett (1998) *Intercultural Communication: A current Perspective*. US: Intercultural Press. 1-34
- V. P. リッチモンド, J. C. マクロスキー (2006)『非言語行動の心理学——対人関係とコミュニケーション理解のために——』北大路書房 翻訳者: 山下耕二